

平成二十二年十一月一日発行 第二十卷第十一号 通巻第三三三号 毎月一回一日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

平成22年11月号

岡井省二創刊



大日忌

高橋将夫

瓢箪は半信半疑の形なり

花も実もなくて小鳥のよく来る木

天狗茸見つきりさうな鞍馬山

鬼柚子や笑ひだしそな憤怒像

罽雲過ぎゆくものは速かりき
真心は胡桃の仁に似たるかな
心にも匂ひあるらし酔芙蓉
夢の世はウイルスがゐて蚯蚓鳴く
自らのぬくみに気付く夜寒かな
花道も末路もありぬ芒原
秋麗に結ぶ定印大日忌

槐安集

水野恒彦

陶枕の冷えの随に師の忌来る
師の遺句にいつびきの紙魚死してをり
子の積木未完のままに夏の果
徐ろにマラーを聴く黴の宿
昭和天皇の猫背を思ふ終戦日

延広禎一

水を吐く海鞘みちのくの息づかひ
ビッグバンまむしの上の蓋じやうあける
まむし京都地方の鱈飯のこと
天の川妹山を抱く背山かな
鶉の贄魔笛流るる真昼かな
玄猿の虚空を掴む野分かな



加藤みき

巡りきし蝸をじつと聞いてをる
涼新た巻きあげてある畑の蔓
藪からしの花は市松人形なり
立入れぬところおしろい群れ咲けり
かはほりや地下鉄車両並べあり

石脇みはる

登り窯の上かまに残照柿の秋
我が道をひたにゆきたるすいとかな
蟪蛄の斧をたしかにふるひをり
大小の影もち揺るる花野かな
縄十字冬瓜重りしたりけり

中島陽華

伊都国に生れて今宵の花扇
仁輪加はね終り初物李かな
厨の戸すつと開きたる大暑かな
おほか削つて焼茄子の相模かな
月草や天川沿ひの行者宿

竹内悦子

白鷺の百を背負ひて樟大樹
殿のわたしの前の落し文
釣銭の穴あいてゐる菊の紋
般若心経唱えてゐたり稲の花
八月や大きく息をして九月

栗栖恵通子

八月六日襟足に汗の道
踊りの輪抜けてをみなとをのこかな
迷ひつつ入道雲になりきれず
締切を二、三抱へる残暑かな
さうめんの紅き帯解く真昼間

大島翠木

足裏少しみせて象来る鯛雲
大日や軽鴨五つ従へて
藍甕は休ませてあり瀬戸風鈴
黒葡萄こけしの首のきゅきゅうと
底紅のむくげピエタの絵画かな

雨村敏子

デルタといひカオスといふも夏の霧
空蟬に天地の音届きけり
大阪や麦藁章魚と祭鯉
白桃に海の匂ひも水音も
小鳥来てまた小鳥きし影うごく

本多俊子

一步とは明日へつなぐや秋はじめ
雁来紅暮色の重さありにけり
横顔の秋思のおもひ阿修羅像
鰻のへそを食べ渾沌としてをりぬ
ネクタリン黒き瞳のあにいもと

小形さとる

クリークに稚わかき月あり江戸切子
生身魂ごろた石などいらひをる
横川よかわより腕をもどす昼寝覚
夕菅と飯でも食うてみたきかな
杉の奥に杉暮れのこる夏げ入りかな

久津見風牛

慈雨すぎてエチユードの空残りけり
夕雲に色なき風の走り見ゆ
ひりひりと炎暑の木肌まくれかな
さぎ草に放ちやりたき羽音あり
顎引いて墨磨つてをる水鶏かな

近藤 きくえ

星飛ぶや肌の護符につと触れて
校倉の木組さやかに影をおく
今世を精魂のこ糸終の蟬
盆過ぎの便り一通星の夜
朝の日のひかりとなりて小鳥来る

近藤 喜子

寒蟬の命かがやく赤き声
流星やこの世に生まれきしは何故
少年にかなかなの蒼き夕暮れ
しんがりに帰天の友や走馬燈
赤きほほづき人臭くなりけり

谷村 幸子

世界地図ひろげしままや鳳仙花
ずんぐりの繭の木ほめて秋扇
はからずもお風入れなり真如堂
玄関に据えてみたりし大南瓜
声かけてより紅くなる鶏頭花

瀬川 公馨

防人を笑うてゐたる夏のむつ
炎天を延びづつて来る生魍魅
かなかなの黙のひとびと打ちにけり
送り火や大黒さんの欲の皮
夜来香イェライシャンとアイスクリームパーラーと

久保東海司

山肌を深くえぐりし男梅雨
記者室の男臭さよ水中花
河童忌や書庫の一冊読み直す
霧襖開らかむ妻の男騎のり
大夕立止んで巷のよみがへる

松原伸子

ゆく夏の夢に炎の立ちてをり
風蘭や人ごゑ消えし沢の水
水の地球風ざはめきて九月かな
木の闇に月日重ねし笑ひ茸
鷹渡る沖はるかなる火の辻に



槐市集

橋本正二

秋蝶のもつれて上る螺旋かな
水中花のぞくをんなの片えくぼ
芸術祭ひとに逢ひたくて行く画廊
タンクトップの胸に残暑の紫外線
サングラスのをんなの覗く水かがみ

橋本順子

白桃やみづうみに水満つるとき
雨上がり一氣に外す鉢被ひ
花火の尾垂るれば動く星一つ
朝鴉口開いてをる残暑かな
青虫をチャックのやうに外しけり

藤澤陽子

秋たつや深呼吸して伸びをして
小窓より風の入りきし衣被
篋の旧居を塞ぎ草の市
鷹の爪白壁に吊る茶房かな
稲の香の中に洋館建ちにけり

前田美恵子

終戦の日や往年の怒り肩
夏の星夜汽車の汽笛無限大
あめんぼうもんどり翻筋斗打つて発ちにけり
台風の目玉しつかり巻ひてをり
口どけの麩菓子暑中見舞かな



槐集

高橋将夫選

夜の桃を宇宙に挑ぐる猿女かな
守口 柳川 晋

星合や歴史を眠らせぬ女
変若水の恋水となる月下かな

肉叢は宇宙に憧れ夜這星

処暑といふ呪をかけられて風動く

蟬の羽化見し子の夢のうすみどり
枚方 谷岡 尚美

滴りの脈搏つやうな間合かな

三伏や古書をかたづけをりにけり

何時の間に忘れし夢や雲の峰

トリスタンとイゾルデ夏の夜の闇

堂々の発禁本の曝書かな
守口 岩下 芳子

掌に唯我独尊子かまきり

省二忌の健診桃色聴診器

転た寝の刻銀漢の中にをり

月白の入江にマスト林立す

この地球どこまであつく冷奴
枚方 中野 京子

バラの湯にもどしてゐたるスルメかな

散らばりし心を集め夜の端居

夏の海大樹は空に枝を分け

烏賊墨の Pasta を食ふ腹の闇

榎林の水底青き夏の沼
富松 寛子

あめんぼの水を離れて見失ふ

青葉木菟秘めたることは秘めしまま

天牛の力を甘くみてゐたり

黄道吉日羅の膝正しうす

永久に飛ぶエミールガレの蜻蛉
岡崎 岩月優美子

秋日差しロココの肌もも色に

広島の川あかあかと八月は

歌垣の声の聞こゆる天の川

耳底に聴く秋蟬のシンフォニー

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

夜の桃を宇宙に挑ぐる猿女かな 柳川 晋

猿女は古代、大嘗祭 鎮魂祭での神楽の舞や天皇の前行などに奉仕した女官。その猿女が夜の宙に桃をかかげている景である。簡明な景で紛れはないが、非日常の景だけに、なかなか思い浮かべられない読者が多いかもしれない。「なぜ桃をかかげるのか」などの説明、理屈は抜きにして、ただその景にひたればよい。何も共鳴しない読者がいればそれはそれでよい。

〈星合や歴史を眠らせぬ女

晋◇

〈麥若水の恋水となる月下かな

〃◇

〈肉叢は宇宙に憧れ夜這星

〃◇

これらの句に共通するキーワードはエロス。密教は何より人間本来の本能やエロスを祝祭し、暗黒をバネとして翻転して大歓喜とするところがあるという。

〈まぐはひは神ぞよろこぶ朱欒かな

省一◇

〈ふるひたちてはまぐはふや一茶の忌

〃◇

槐同人なら誰もが知っている先師の句。本能やエロスを祝祭したそのままの句であるが、次の句はどうだろうか。

〈やみつきのぼつぺんを吹くばかりかな

省一◇

句会の後でベテランの先輩が「先生の句らしくない」と話しているのを仄聞した。おそらく、当人はこの句の持つエロスの世界に気付いていなかったのだろう。

何時の間に忘れし夢や雲の峰 谷岡 尚美

極めて素直な心の表白。雄大な雲の峰を見ていて、ふと自分にも大きな夢をみていた時期があったのを思い出したのである

う。いや、忘れたとどぼけながら、案外夢を楽しんでいるのかもしれない。

転た寝の刻銀漢の中にをり 岩下 芳子

銀漢の中で転た寝とはなんともまた壮大な虚。ここまで言われると文句のつけようがない。豪快といえば、次の句もまさに堂々たるものといえよう。

〈堂々の発禁本の曝書かな

芳子◇

散らばりし心を集め夜の端居 中野 京子

連日の猛暑で身も心もほろほろといたところ。熱帯夜に端居して星でも見ながら、なんとか暑さをしのいでいる。心が折れるというから、ばらばらになっても不思議ではないが、暑さがよほど応えたのであろう。体調が少しは回復し、散らばった心を集める余裕が出てきてよかった。

青葉木菟秘めたることは秘めしまま 富松 寛子

心に秘めたことは、また誰かに聞いてもらいたいことでもある。青葉木菟は最後まで心に秘めておくそうだ。

永久に飛ぶエミールガレの蜻蛉 岩月優美子

エミールガレはアル・ヌーヴォーを代表するフランスのガラス工芸家。そのやわらかな曲線の蜻蛉ならきつと永久に飛び続けるだろう。

門火焚き手を振る闇のほのあかり 西村 純太

魂を迎え、送る門火。まるで魂がほのあかりの向こうに人の姿で立っているようだ。(以下略)